

一般教育の新しい局面

自叙伝ではなく歴史としてのカリキュラムの開発：
ポートランド州大学における一般教育改革のケーススタディ

マイケル・リアドン
ポートランド州立大学

New Aspects of General Education
Curricular Development as History not Autobiography: A Case Study in General
Education Reform at Portland State University

Michael Reardon
Portland State University

(翻訳版)

アメリカの高等教育におけるカリキュラムの変化は、専門分野の特権の代表を務めている教官や、学部学生としての自らの経験を持っている教官によって、しばしば政治的な交渉であるかのように取り組まれてきた。このような取り組み、あるいはこれら2グループの組み合わせでは、カリキュラムを社会的歴史的発想として認識できない。さらに効率的な取り組みをしようとするれば、教官がその専門的な見地から、社会の期待と学生の必要性という条件のもとで開発した学習のための意図的なデザインとして学部のカリキュラムを考える必要がある。このカリキュラムの発想は、認識しておくべき以下のような基本的要素をとらえている。カリキュラムは、我々の現在の専門分野の構造に従って編成された独立の知識だけではなく、一般教育や主専攻科目、選択科目が組み込まれた公式の取り決めでもあるべきである。またカリキュラムは、教育システムと職業システムの融合と、より大きな集団としての高等教育の経験(歴史)とを反映させるために、教官によって設計されるべきであることを明確に強調できる。私の大学での最近の経験を用いて、このカリキュラム変更の発想のケーススタディについて述べる。より大きな問題は特定の大学のケースにも反映されるので、このようなケーススタディが重要な問題点を浮き彫りにできることを期待している。

北海道大学主催の「これからの大学教育と教育評価」に関する会議に参加することは、私にとってたいへん名誉なことである。わがポートランド州立大学は、何年にもわたって北海道大学と働く機会を持ってきたが、それは多くの利益をわれわれにもたらしてくれた関係であった。今日の午後の私の話題は、カリキュラム改革、特に一般教育の改革である。David Damrosch は最近の著書「大学の文化を変えて

いる我々学者」でこう書いている。

研究の一つの分野として考えてみると、学究生活という課題は、すべての若い学者がまだ大学院生のときから一種の専門家となることを強いられる課題である。大学の問題を書こうという気になった人には、アカデミアに関する文献を調査する価値をまったく認識しないような強い意見や、

経験論の積み重ねを進展させてしまうという危険を犯す可能性さえある。学問の問題を議論している驚くほどの数の寄稿論文は、バスの運転手の休日の自家用車運転のような流儀で書かれている。自分の専門分野ではその問題に関する大部分の文献を読まずに論文を書こうなどとは決して思わない人が、大学の問題になるとひどい本を書くものである。その本全体が、自分の知っている範囲内の領域の専門家の仕事をぞんざいに眺めただけにすぎないことを如実に示していることがよくある。

ときに管理職の教師は、直接的な経験の信ぴょう性をなくさないようにするために原則について述べた資料を読むことさえ放棄する。(Damrosch 1995)

Damrosch の観察は私の論文のタイトルと論題をはっきり示している。教師たちは、学生として直接経験したことについての自叙伝的な反省として、学部教育改革にアプローチする。しかし、学部教育の改革はそれ自身歴史と複雑性と発展性を持ち、それゆえにわれわれの学部教育の理解のために重要な一群の文献を持っているのである。

Damrosch が非常に正確に書いているこのような状況の明らかな困難さは、Mary Douglas の著書「組織はいかに考えているか」で指摘されている。管理者を含めた学部の圧倒的な人々は、スタッフとしての経験をもとに彼ら自身の文化と組織に関連した問題について話したり行動する傾向があり、スタッフとしての彼ら自身の知識に基づくことはまれである。Douglas は次のように指摘している。

組織は彼らが正式だと認める関係と同じ形式にシステムティックにそれぞれの記憶の向きを揃え、我々の理解の道づけをする。彼らは本質的にダイナミックな過程を固定化し、その影響を隠蔽し、標準化された問題の標準化された調子に我々の感情を導いていく……彼らが提供する解決方法は、ただ彼らの限られた経験だけに由来する。もし組織が教官の参加に依拠するものであれば、組織はわれわれの気も狂わんばかりの問いかけに、「もっと多くの参加を！」と答えるであろう。もし権威に頼るのものなら、それはただ「もっと多くの権威を！」と、答えるだけであるだろう。コンピュータの世界はそれ自身のプログラムがすべてである

が、組織はこのようなコンピュータ的誇大妄想を持っているものである。われわれにとって、知的な独立のための希望は抵抗であり、抵抗の必要な第一歩は組織がどのようにわれわれの心をつかんでいるかを見い出すことである。(Douglas 1886)

組織の任務、カリキュラム、アカデミーの構造、あるいは教育役割などについてファカルティーで議論するときは、Douglas の分析を考慮に入れて熟考するようお願いしたい。私はさらに彼女の結論は効率的な契約のために絶対に正しい第一歩であると思う。私たちの心に制度的・文化的影響がどのように及んでいるかを知らなくてはならない。私たちは私たち自身をその研究の対象にするべきである。このような研究の進路はどのようなものになるだろうか。確かにその研究はヨーロッパおよびアメリカの伝統のなかでの高等教育の展開を含んだ方がよいが、それ以外の異なる組織の発展をも含むべきである。現在の学際的な知識の構造を創り出してきた学者の共同体としての学部、専門文化のなかでの専門家として発展してきた学部を含むべきである。これは最初の基礎的ではあるが決定的な段階である。なぜなら、将来発生する問題、学者として解決すべき問題は、このような基礎的要素を含んでいるからである。カリキュラム設計、一般教育あるいは教養教育、専門教育、専門家としての貢献、あるいはコミュニティでの学習、評価過程の開発デザイン、などの仕事は、すべてファカルティーをある特定の組織的な使命に向けさせるために必要である。そこで、ファカルティーをこのような仕事につかせるのであれば、ファカルティーの多くが基本的な問題をすでにどの程度認識しているかが重要になる。その認識の程度が高ければ、さらに多くの教師の目を特定の問題に向けさせ、もしその問題の予備的研究が最初のステップであれば、最良のアプローチを現にしていることを認識できる。研究はその後明らかに基礎から微細な問題へと進むが、次のようなアプローチはすべての段階において同じである。考慮されるべき問題や学問的問題として、ファカルティーが行動する必要のある問題をまず定義せよ、ということである。

たぶん例をあげた方が良いだろう。「PEW 高等教育円卓プロセス」の一部として持たれた円卓会議において、私たちは一般教育の問題を論じていた。このような論議はよく行なわれていたが、私たちはよく自

らの経験に基づいた態度をとったものである。参加者の1人で理学部に所属しておりいつでも理学部にいるように見える人は、ひどいフラストレーションに陥って、「結局すべての学生が教養教育をとるべきであるのに、なぜこれについて話をしなければならぬかわからない」と発言した。教養教育とは何かを述べるように求められた時、彼は「私が受けた講義のようなもの」と答えたものである。私たちは詳細な検討を続け、さらに多くの参加者がはっきりと理解できるようになったので、教養教育の概念の歴史と哲学と起源について学者グループ全体として驚くほど統一されるようになった。自分の経験をもとにした態度をとることは容易であったし、理解に基づいた論議と討論にまでは我々の力が及ばなかった。この例は私の主張を裏付けている。

カリキュラムを部分的であれ変えようとするときは、そのカリキュラムを作り出した歴史的過程を理解することが不可欠である。歴史的発展は少なくとも3つの階層からなる。つまり、カリキュラムがより大きな社会-経済関係の反映であるような長期の展開、さらに専門的な高等教育史の発展、最後にこれら2つのより一般的な発展が生み出した個々の組織の発展への反映である。ここでは最初の段階から始めて、私自身の組織の歴史のなかでの特定の出来事、つまり一般教育プログラムの変更の問題に移っていきたい。

1870年頃から一連の構造的変化が始まり、輪郭という意味では現在にまで通用するような組織が形成され、主要なヨーロッパの教育のシステムを完全に変えた。おそらく変化の割合は1880年から1890年の間で最も大きかった。この期間は鋭い社会的対立や、互いに競合しあうカリキュラムの認可をめぐるおおびらで激烈な議論や、教育された人(あるいは不適切に教育された人)が余っている(と思われる)ことについての強い不満がうずまいていることによって、動揺の激しかった時期である。教育の主要な再編成が1900年と1902年の間にドイツとフランスで着手され、高等教育における断固とした再編が新世紀の到来に際して効力を発揮した。ヨーロッパ大陸の2つの主要な教育システムの徹底的な構造変革は、おおむね1910年に完了した。

この重大な時期の変化を記述する1つの方法は、この改革が、中等・高等教育を高度産業社会の職業システムと緊密に相互作用できるものにしたとい

うことを指摘することである。第1に教育システムに含まれたのは、新しくて名の通っていないような組織やカリキュラムであった。それらは現代的、技術的、応用的であり、したがって、経済的、技術的発展に寄与する潜在的に実り多いものと思われた。主に職業システムの側に影響を与えたのは、過去の産業の先駆者よりも教養があつて、なおかつ、おそらくは貿易と産業にいつそう関係が深くなった広範囲にわたるより新しい職業であった。19世紀後半にこのようにして始まった部分的かつ産業部門ごとに行われた教育システムと職業システムの集中は、現代的な学問と一般教育の概念を持った組織を生みだし、周期的に起こる危機を経験しながら現在の状態にまで続いてきた。私たちの現在の問題は、いまだに教育および職業のシステムの間融合を理解する必要性によって明らかにされるのである。(Ringer 1992)

今世紀の合衆国において大学の学部カリキュラムが発展したときの背景とは対照的な現在の状態を直視すれば、学部教育の今の問題を良く理解し、そしてその改革や発展をめざした戦略を評価することができるようになる。

20世紀初めのアメリカの高等教育への挑戦は、新しい学生からの急速に増加する要求と高等教育の資源を新しい国家的国際的な体制に適用する必要性を処理することであった。新しい学生たちは、その背景と野心において前の時期の伝統的な学生達とは異なっていた。カリキュラムはこの新しい学生のニーズと新しい社会のニーズに答える必要があつた。1つの反応は、Irving Babbittの1908年の業績「文学とアメリカの大学」を反映した古典的な伝統や文化の動向をもとにして人文学研究者の手法により発展した1920、1930年代の新しい一般教育の動きであった。2つ目の反応は、革新的教育の動きとJohn Deweyの実用主義哲学からきた道具主義者の手法から生じた。

両大戦間に3つの新制度が出現した。コロンビア大学 Nicholas Butler 総長による一般教育の人文学プログラム、現代文明プログラム、Glenn Frank 総長がアマースト から Wisconsin 大学へ Alexander Meiklejohn を連れて移った時に設立された実験大学 (Experimental College)、そして Robert Maynard Hutchins がシカゴ大学において確立した Great Books Program である。合衆国が第一次世界大戦に参戦したとき、陸軍省 (War Department) はコロンビア大学に学生陸軍

訓練センター (Student Army Training Corps Centers) で教えることになる戦争問題 コース (War Issues Course) を開発するよう依頼した。その目的は、訓練中の士官に戦争の背景と意味を理解させ、戦争のもとになっている複雑な関係の処理を助けることであった。Carol Gruber は 1919 年にコロンビア で実施された General Honors (Great Books) と現代文明コースの起源を述べている。

コロンビアにおける現代文明コースに必要とされる導入部は、戦争問題コースとカリキュラム改革の間の関係を明瞭に説明している。コースの主任で主にそのシラバスを準備することに責任があった Woodbridge 学部長 は、コースの進行中にこのコースが「今日の青年期の間の教養教育」の有望な基礎だと考えられ始めていることを示唆した。古典教育の崩壊によってもたらされた思想と基準の混乱に直面して、彼は、戦争問題コースが「その世代に常識的な背景と、一般に理解しうる標準的な判断力を与える自由主義の力を教育に導入する機会」を与えるように思われると述べた。歴史、経済、政治、哲学の学科のメンバーが申し出た現代文明に必要とされるコースが、1919 年秋にコロンビアにおいて導入された。その目的は西洋文明史の背景を概観すること、そして学生に現在の世界の問題を知らせることであった。急進主義に対する盾としてのこのような教育の振興は、愛国的な戦争問題コースとしてその本性を表してしまった。創設者 Herbert Hawkes 学部長は、これは大学生を「品位があり健全である政府に反対する輩の議論と対抗」させ、「民主主義のために安全な市民」にすることにより「我々の社会での破壊的な要素」を静かにさせるものであると述べた。(Gruber 1976)

現代文明プログラム (Contemporary Civilization Program) を構成するコースは、合衆国の近代的高等教育の歴史のなかで最も影響力を持ち広く真似された 2 つの一般教育コースとなった。

ウィスコンシン の Meikeljohn の実験大学 (Experimental College) は、最初の 2 年間の学習のために共通の首尾一貫したカリキュラムを提供した。2 つの異なった文化、古代アテネと現代アメリカについての学習がコースを構成しており、これによって学生た

ちがギリシャの心、労働におけるギリシャの知性の感覚、その真中で学生が生きてきた現代アメリカの心に親しめるようにさせた。シカゴにおいて、Hutchins は 2 つの主要な改革を指導した。1 番目は構造的なもので、4 年間の通常のカリキュラムを持った高校で 2 年目を完了した学生を受け入れる独立した 4 年制単科大学であった。2 番目の改革は一般教育コースで、「西洋世界の最も素晴らしい本から成り立っている学習コースと、人間の理性のプロセスの最も良い例としての数学ならびに読み書き考え話す技術」になるはずであった。

人文学者による新しい一般教育は、教養ある人のための重要な知識として歴史と文学を書き直した。そして皮肉かつ保守的なことに、Hutchins の見解は西洋文明の歴史を扱った素晴らしい本や教科書を融合させた。彼は、その著書「素晴らしい会話 (The Great Conversation)」のなかでこう述べている。

西洋の理想は会話それ自身にあり、それ以外のなにものにもない。西洋文明とはそれらの本を意味する、と言うのは言い過ぎであろう……。しかし、それらの本が文明社会を表現できているという程度のことは言える。西洋文明の思想はここにある。これらの本は、我々の社会と我々自身を理解するための手段である。それを知らなくても我々を支配している偉大な理想を含んでいる。我々の伝統には比肩しうる類似の宝庫はない。(Hutchins 1955)

失われた学部カリキュラムの黄金時代に郷愁を持っている人々を鼓舞しているのは、このような Hutchins の信念である。さらに重要なことに、Hutchins は、Edward Said が明らかにした見解を説明していることである。彼によると、西洋のものの考え方に対する東洋文化の人文科学的貢献は、偉大かもしれないが外国の教科書にもとづいて他の文明を定義するようなものだというのである。

もう一つの動きは、人文科学のプログラムと並行して、Dewey のプラグマティズム、道具主義および民主的な社会のための教育の基礎をなしているイデオロギーの影響を反映していた。Dewey にとって教育の最終的な目的は、個人の成長のための継続的な力であった。すなわち、ただ経験だけが成長可能な状態をもたらすことができるゆえに、個人の経験を継

続的に拡大させることが目的になる。経験は同じく教育の手段である。なぜなら、問題を解くという経験は、成長のしかた、将来の成長のための新しい状態の作り方そのものだからである。こういう考えから、進歩主義者と道具主義者は、非常に個人的な教育へのアプローチのしかたを考え出した。このような教育の方法は、社会的反映を基礎としていた。問題を定義し、データを集積・分析して、忠告やアイデアを提案し推考し、それによって導かれる結論や判定を検証し、実験的な応用を行う。

評論家たちの言に反して、Deweyと彼の追従者は、方法を持っていないだけでなく主題をも持っていなかった。他との違いは、どちらかと言えばいっそう伝統的なカリキュラムの中にこそあった。このようなカリキュラムでは、教育主題である歴史であれ化学であれ何であれ、学生が直接経験できることの外にあった。そうしたものを選択し、組織化し、学生たちの将来のためにと大人たちが教えた。活動としての教育は、受動的な学生の上に働きかけるのである。道具主義者にとっては、教育主題は学生が当面関心を持っている問題を解くのを助けるための入手可能な資源の1つなのである。既存の知識は、現在を理解して未来を創り出す手段になる。ある命題がこのような仮定から導かれる。一般教育は直接の体験を通じて教育と深く関わっている。一般教育は過去よりもむしろ現在と未来に関係している。一般教育は現在進行形の生涯教育である。

一方、このパラダイムの主要な側面には以下のような道具主義者の見解が反映されている。すなわち、文化適応する移民が(この人たちは西洋的伝統の基礎的理解の機会が奪われているように思われる住民なのだ)、民主主義を推進するために欠くことができない世界および英語の文学、西洋文明、合衆国史、を継続して勉強しようとしていたという継続教育の問題である。第二次世界大戦とその余波は一般教育の革新的概念のバランスを崩そうとした。Deweyの教育の追従者にとって、民主的社会とは民主主義を主に手続きとしてとらえる考え方そのものであり、共同体において個人が問題を解いてその文化を作る1つの方法であったと論じることができよう。彼らにとって、一般教育はこの手続きの継続を保証する1つの手段であった。1940年代と1950年代に、大恐慌の記憶、戦争の経験、冷戦とそれともなう反共産主義のイデオロギーなどにより、民主主義とは手続

きではなく制度であり、そしてその制度の保護が教育の最終目標になった。

戦後のカリキュラム作りで最もよく知られている思い切った事業は、疑いもなくハーバードの政治的に活発な学長 James Bryan Conant によって選ばれた12人のシニア・ファカルティからなる委員会であった。自由社会での一般教育を発展させる責任を負って、この委員会は1945年に Harvard Redbook として知られている報告書を作成した。Frederick Rudolph (カリキュラム1977年)がこの報告について以下のよう述べている。

画期的な文書、Harvard Redbook は、(Eliot 総長が自由選択システムを制定した時に)抜け落ちてしまったカリキュラムをある程度の質と価値にまで戻す努力であった。国内最高の大学の一部を、今世紀なかばのアメリカの社会的政治的な力と対決させ、個人の興味と才能の正当性を認識すると同時に、一般学習の共通の絆を確立するカリキュラムによって、自由主義の伝統を維持する処方箋を書く努力を表現していた。

この努力において、ハーバードの委員会の側には甚だしい皮肉がある。アメリカの民主主義と社会の安定性は、政治的権力が少数の教養がある人たちから無知な大衆に移行することによって脅かされている、とハーバードはある程度警告していた。この報告書はその解決策として首尾一貫した一般教育プログラムを提案した。プログラムは、人文科学、社会科学と自然科学の3つのコアコースの開発を必要とした。人文科学のコアはコロンビアの Civilization コースの改作であるはずであった。ハーバードの学部は決してこのプログラムを実施しなかった。ハーバードは均等履修モデルに移ったのである。

他の大学、特にハーバードがこのプログラムによって誘導しようとした公立大学は、ハーバードの一般教育に対する独自のカフェテリア(セルフサービス)的アプローチをまねるほうがより容易であることを発見し、均等履修モデルを模倣した。コロンビアのコアコースモデルの方は、めったに模倣されなかった。しかしこのような侵食は、その後数年以内に収まった。若干のプログラムが生き残ることができ、周期的に若干の機関が一般教育に合わせた目標を達成するよう努力する間に、戦後の主要な傾向

は、専門化、部門化、研究重視の流れの力に従った。この傾向は、さらに連邦予算の注入によって燃料を供給されて大学の圧倒的な特徴となった。一般教養大学(Liberal arts college)は多くの場合これらの力に抵抗することができたが、入学者数を増やして急速な膨張に直面していた公立大学はできなかった。研究大学モデルを模倣する競争と、アカデミックな職業における出世第一主義の増大は、1950年代以来アメリカの高等教育を特徴づけた。1968年以後の大変動とベトナム戦争時代の抗議さえ、高等教育のカリキュラムの構造には影響を与えなかった。女性研究と黒人研究という最も明白な新機軸のうちの2つのカリキュラムが、学科システムと均等履修モデルに組み込まれた。

総合大学と単科大学に関する問題については繰り返し発言があった。Rudolphはこう指摘した。「学習の幅、主専攻領域の拡散、および一般教育の問題は、新しい学長、野心的な学部長、名ばかりの見せかけだけで教養教育の考え方を支援した同僚たちにより特別なカリキュラム委員会に任命された善意ある人文学者にとって虎の巻であった。見せかけが学科や専門科目の利害と衝突した時には、非常にまれに一般教育が専門科目に勝った。」(Rudolph 1977)それまで教育の価値とは何であるか、均等履修の目的が何であるかについて意見の一致がなかったので、均等履修モデルによって教師は一種の公然たるアカデミズムの欺瞞に巻き込まれた。一般に私たちは、学生たちになぜそう要求しているか、ということについて確信を持っていない。自由選択と幅広い学習の名のもとに、学生たちに、せいぜいのところ共通の必須条件と履修順序でうまく形をつけた科目表の中から1セット選択するよう要求するが、それだけでは答として十分ではない。カリキュラムの構造を防衛するため、私たち自身の鏡である大学の教師になろうとする学生たち、私たち自身の経歴、専門分野を支えるカリキュラム固有の論理を引き合いに出す。けれども私たちの目的はただ未来の学者と教師を育てることだけではない。実際そういう人たちは学部教育を受ける者のなかでは少数派である。均等履修モデルが達成したものは、一般教育を非重要科目へと縮小させたことと、19世紀後半にすでに最後の重要な発展を遂げてしまった歴史的な研究部門を引き続き再生産したことである。

均等履修モデルは、財政的には損害を与え、学問的

にも怪しくなるところまでコース提供の数と学生の選択肢を急増させた。私たちは今、官僚的でアカデミックな一種のカリキュラム構造に直面している。この構造は、専門分化の極限段階を反映して、学生が知的生活の活力にあふれた重要な次元に出会ったり、さまざまな分野をまたがった討論に遭遇することを妨げている。私は、Gerald Graffの最近の本「文化戦争を越えて」が非常に有益であることを見出した。この本は、我々の現在のカリキュラムにおけるこの問題を明瞭に表現している。Graffは指摘している。

論争が知的な組織の生命と精神に関するものであるかぎり、それを避けたり覆いかくしたりすることは、カリキュラムにとって有害な結果をもたらすだろう。カリキュラムは、課題や、広い見地や、コース同士を結びつける手段なしに放置されたので、それ自身ももっとも緊急を要する不適合に直面することになった。絶え間ない知的な論議の中心になる代わりに、大学は、教室の知的な強さとキャンパスの社会生活とのあいだに深い断絶を作って、知的な生活を授業時間の中に閉じこめてしまった。問題は、それら自身にある官僚的分野の存在ではなく、そのような分野をカバーすべきだという考えでさえない。むしろ、それらの間の対話を開く可能性を持った接続の原理を発展させることに失敗したということが問題なのである。

組織が分野をカバーするという原則を持つことの利点は、それにより事実上学科とカリキュラムに自己管理をさせることができるということであった。ひとたびある分野の一定の範囲に教師が配置され、コースがそれ相応に設定され割り当てられると、人文科学と(自然)科学の目的、異なる時代、方法論および価値の関係について表面化したより大きな疑問がいちおう自分自身で扱われるようになった。このような疑問はコースのあちこちで生じていたかもしれないが、まとめてそれらを討論する必要はなかったし、そうする場もなかった。学科の縄張り争いで隠されていたが……些細とはいえない知識の性質とその近代社会における位置について一連の対立が存在した。最も重要な知識は科学的なものか、人文学的のものか、あるいはある程度その両方か？これらの用語は何を意味しているか、そしてそれらの関係は何か？増大する知識の専門化は良いのか、悪いの

か? 1800年を境とする前と後の世界のしばしばひどく対立する主張や権利を, どのように仕分けるべきか? 科学や芸術や批評についての社会機能はどうなっているか?

大学は, このような大問題について相いれない答えを多数もっていたが, それに関わることはしなかった。そして, ファカルティーとコースとの関係を構成している対立をこのように回避したことは, カリキュラムにおいても再現され, 結局そのつけが学生に回された。学生たちは, 分野分割のもとになってかなりの程度それを定義している(分野間の)争いと協調に気づくことを期待されずに, 研究分野のサンプル抽出を行ったのである。

アメリカの高等教育の現在の状態は, (特に一般教育に関連して) 今どうなっているのだろうか? ここで私が述べた短い歴史的概観は非常に風変わりであり, 数多くの側面と発展を見落としている。同様に, 現状の輪郭を描こうとするどんな試みも部分的であることを避けられず, 私自身の見方を反映するものになる。確かにこの話題について利用可能な文献は膨大である。今日私たちは, たいいていの場合整理されていない選択科目の寄せ集めや, これ以上ないというくらい少ない必須コース, 集中された主専攻分野からなる学部教育の無定形さに狼狽している。私たちのうちの誰かがこの状態を正し, 一種のコアカリキュラムの形を復活させることによって教育の質を取り戻すことだろう。これは確かに質の揃った学生のいる一般教養大学のひとつの選択ではある。けれども近未来社会の要請は, 大多数の教育機関, 特に公立の機関に, 非常に多様なカリキュラムを期待している多くの学生顧客にサービスするよう要求している。ファカルティーに, カリキュラムを決定するということの責任の重さを強調しなくてはならないが, しかしその決定に際しては, 学生の年齢, 経済的背景, 人種, 性別, 産業と労働と政府からの要請などの多様性を社会の決定要素として認識しなくてはならない。これらの必須の要件は, ひとつの固定したカリキュラムではなく, 多様な選択可能なカリキュラムを必要とするであろう。それぞれが, 学生の教育目的と生活上必要なことに矛盾なく関係する一方, それと同じくらい教育の質と厳しい評価基準のための知的義務に依っていないなければならない。行うより言うがやすしという, よくあるケースである。

第二次世界大戦前夜に, 人文学者と道具主義者に

よる計画が, (両者のあいだの, また両者の中の相違にもかかわらず), Gary Millerがアメリカの高等教育の一般教育のパラダイムと表現したものを産みだしていた。彼は, 教育と民主主義の間には直接の関係があり, 一般教育は現代の民主的な社会の共同体と個人の間を発達させることに関係しているという最も基本的な仮定が信念となりうることを見出した。

多文化的教育を用意し, 人間の多様性を扱うことが必要だということについては, ますます勢いを増すコンセンサスがある。これまで果たせなかった種々のグループの興味・利害に応えるために高等教育が呼び出される, という私たちの国民的経験における基本的な要素でありつづけた必要性に対するコンセンサスである。加えるに, 私たちは, 変化する社会, 環境, 政治, 国際的現実を理解し分析しそれに対応するために教養ある一般市民に要求される知識と技能を供給する努力を維持する必要性を理解している。一般教育, 教養教育, あるいは専門科目教育の問題に関するすべての議論と行動を動かしているのは, 抽象的な理想を実現する衝動とその派生的な戦略ではなく, (私たちが努力しているものが教育的に何であるとしても) ある特定の目的である。一般教育のためであれ, 専門教育のためであれ, あるいは主専攻科目のためであれ, アカデミックな必須要件とは, またアカデミックな必須要件のセットとは何であるか?

ファカルティーが全体として, 自分たちの専門分野において, 自分たちの組織の文脈の中で誠実にこの疑問に取り組めば, 進歩と改良は可能であろう。

教養教育が, この世紀の終わりの状況とニーズにどのように適合するかをいろいろ思索する前に, 私たちは合衆国での高等教育が今どこにいるかをはっきりさせなければならない。1) 私たちの教育機関は巨大で, 不規則に広がっており, 著しく多彩であり, ひどく分散化して, 公立と私立, 非宗教性と宗教性, 単一目的と多目的な, あらゆるサイズの学校を含むので, 私たちは本当は高等教育の「システム」を持っていないことになる。2) 実際に高等教育に参加している学生の数(また該当年齢集団中の比率)は, 合衆国だけではなく, 世界的にも前例がない率で増加した。非伝統的な(パートタイムおよび成人の)学生の数が増加したので, 学生の平均年齢が急激に上昇したことも同じく指摘できる。3) 全国的に, 学生集団は宗教, 社会階層, 性, 年齢, 人種に関して極めて多様である。4) 増大する批判の対象とは

なっているが、高等教育はこれらの発展過程におけるショックに対しては非常に効果的であり、各機関はいろいろな組織的・教育的な努力を傾けて対応してきた。5) 合衆国の高等教育の転換において認識されていない主な要素は、知識爆発であった。すなわち、カリキュラム計画と研究プログラムでカバーされるべきすべての分野における新知識の量と範囲の指数関数的増加であった。

急速に膨張している知識の量は、それだけでなく問題を起こすのに十分である。しかし私たちは、新しい知識への知的な挑戦にうまく対処するために大学の構造を再編成するという点において無能力であるために、このような知識の膨張は事態をいっそう難しくする。学科や学校の構造は、19世紀後半と20世紀前半に支配的であった知識の社会学を基礎とした学問分野を密かに書き直してしまう。伝統的な学問は、分析的、方法論的な力を持ち続けているが、もはや現在の多くの研究にとって組織化のための原則とはなりえない。同様に、もはや学部学生を新しい知識の興奮に引き込むことに対して最も重要な思考部分を形成しない。

アメリカ社会における新しい多元的共存は、知識の拡大と知識の分類学を再編成する必要性について相互作用する。私たちは今、すべての分野、特に人文科学と社会科学の分野で、知識の世界的な環境に気づいている。ヨーロッパや北アメリカの状況に完全に排他的に焦点を合わせることは、学生と教官の要求から見ても、知的な厳密性から考えても、今日では不可能である。世界はより小さく、私たちの世界的な理解の必要性はより大きい。次の世紀においてもシンプルで一般的な解決方法はないだろう。それぞれの組織はそれぞれの状況にふさわしいプログラムを考えださなければならないが、それは継続的に生起する複雑な変化を認識し、私たちにカリキュラムと組織構造の両方の変革を要求する。

Toombs 教授と Tierney 教授 (Curricular Transformation, 1991) はカリキュラム改革の3つの異なったアプローチを挙げている。すなわち修正と統合と転換である。最初の「修正」は、既存の学問と専門分野について新しい知識と技術と訓練を適合させる長くよく知られたアプローチである。この方法は、常に財源の増大を必要とし、おのずから経費がかかることになるので、それ自体衰弱しつつある。高等教育のための資金調達の現状は、このような改革方式を非

常に困難なものにしている。2番目の「統合」は、健全な要求に対してカリキュラムを通じて統一された知識、長期的な視野に立つ学習、学問どうしの結合を学生に用意する。統合的アプローチは、若干の分野のカリキュラムではより整合性のある教育を提供してはいるが、そのインパクトは部分的であり、ときどきかろうじて学際的なプログラムを作ってはなんとか存在し続けているに過ぎない。このような学際的なプログラムは、3番目の改革方式が用いられるなら、いっそう重要なカリキュラム上の役割を演ずることができる。3番目のアプローチである「転換」も、「修正」と「統合」の持つ要素を含んでいる。しかし、カリキュラムがうまく対処しなくてはならない新しい問題があるということ、またこのような問題の多くがまだ完全には定義されないということについては、人によって認識のズレがある。現在の私たちの状況では、男女同等、人種平等、グローバリズム、多文化主義、倫理などには、環境、健康、教育政策と同じように大きな重要性がある。社会との協力は、適切に教育を提示するために必要であり、地域へのサービス学習のような活動を通してカリキュラムの重要な要素となるべきである。このような問題とこのような機会は2つ合わせて人々に疑問をなげかけるものであり、また現在の学問分野と専門化された教育プログラムが部分的にしか関与していない緊急の需要を提起するものである。

もし「転換」がカリキュラムのために最も効率的なタイプの変更であるなら、何が変えられるべきかについての概念が必要である。「カリキュラム」という用語は正しい標識ではあるが、一方ではいろいろな意味を伴うはっきりしない言葉である。カリキュラムがどうあるべきかという分析に有用な定義が Toombs と Tierney により与えられている。「カリキュラムは、専門的な知識を考慮に入れて、社会の期待と学生の必要性という状況のもとで、教官によって取り決められる意図的な学習デザインである (Toombs と Tierney 1991)」。この定義は、留意すべき不可欠な要素を含んでいる。カリキュラムは、教えられるべきしっかりした知識を意味するだけでなく、授業や順序やプログラムや専攻などについての正式の取り決めでもあるべきである。さらにこの見方は、正しく以下のことを強調している。カリキュラムは教官によって組み立てられるべきである。カリキュラムは高等教育の歴史とより多くの経験の両方を反映して

いなくてはならない。しかしカリキュラムは、その特定の組織において、その学生のために、そこにしかないファカルティーによって構築されたものとして必然的になる。

私はポートランド州において、最初に一般教育の分野で私たちが何をしたかについて述べたい。私たちの経験が、アメリカの高等教育で起きている変化の型の具体的な事例の紹介となることを希望する。しかし、同時に私たちの計画が、特に私たちの学生と、公立の都市研究大学としての私たちの組織の使命とに関係があることを強調しておきたい。

私たちがカリキュラムの変化の過程のどこにいるか、そしてどのように進んだらよいかを明らかにするために、最近の数十年間にわたる高等教育の発展を見渡す視野の中で整理し、この観点で私たちの行動を振り返ることは有益であろう。最近の研究の多くからはっきりしたことは、私たちの学部カリキュラムは一般教育、教養教育、専門教育という3つの主要な要素で発展したということである。それぞれの要素はそれ自身特定の起源と一定の歴史を持っており、他の2者と関係をもちながら転換を経験した。あるときは、それぞれの要素を明確に定義しそれらを区別する試みがなされ、あるときはそれらを統合する試みがなされた。教養教育の概念と一般教育の概念の間には重要な区別があるし、それぞれの起源は非常に異なるけれども、第二次世界大戦後の傾向は、1つのカリキュラムの目的と到達点にもう1つのカリキュラムの方法と手段を組み合わせ、1つのカリキュラムに統合することである。2つの要素の基礎をなしている仮定が異なっているので、このような混合物はしばしば機能しない。まさにこの問題こそ、学部教育に関する現在の多くの論議の中心である。一般教育の性質と歴史について入手可能な完全な分析である Gary Miller 教授の「The Meaning of General Education」のなかで、一般教育はその発端から次のように意図されたことが指摘されている。

……一般教育とは、自覚的に開発され維持されている包括的なプログラムで、個々の学生に次のことを身につけさせる。調べる態度、問題解決の技能、民主的な社会と結び付いた個人とコミュニティの価値などである。さらに、学生が生涯にわたる学習過程を維持するために、これらの態度、技能と価値を応用するために必要な知識、自己完

結した個人として民主主義の手続きを通して変化することを約束された社会の全面的な参加者としての機能などである。こうして一般教育は以下のように特徴づけられる。包括的な視野、学生と社会に直接関連した特殊で現実的な問題の強調、および将来の必要性。また教育の目的と同様に、教育における方法と手順に民主的な原則を応用すること。(Miller 1988)

我々が最近制定したプログラムの基礎には上のような一般教育の概念がある。

PSU の大学学習プログラム

ポートランド州立大学は、現在の均等履修方式とはかなり異なった一般教育プログラムを採用した。University Studies は現代の学生にいっそう首尾一貫して結合力のある学習を提供し、最終的には生涯学習し続ける態度と技能を身につけた卒業生を生み出すことを目指す。学部生としての学習経験を全面的に拡大させることのほかに、研究に基礎を置いたプログラムを計画した。

- ・共同作業能力を身につけさせ、学生にチームワークの経験を提供する
- ・この大学の低い在学率と卒業率に取り組む
- ・中・高等学校およびコミュニティー・カレッジとの調整を築く
- ・必修のコミュニティー学習の経験を通して、コミュニティーとの関係を格段に改善する

一般教育分野における私たちの研究と論議によって、ポートランド州の学生が特に必要とすることに応えるプログラムのためのいくつかのポイントが明らかになった。

- ・チーム教育
- ・学際的なプログラムとコースのクラスター
- ・コース中のアカデミックなスキルの統合
- ・カリキュラム全体に多様性と多文化的課題を含ませること
- ・学生の社会奉仕と社会学習
- ・学生 学生および教官 - 学生間の相互作用の強化

4つの教育目標を強調することにより、以下の4つの要素がプログラム中のすべてのコースに共通に存在することが期待される。

- ・コミュニケーション
- ・多様性と多文化主義
- ・調査と批判的な考え
- ・倫理上の問題と社会的責任

初年度においてすべての学生は‘Freshman Inquiry’というタイトルの1年間のコースをとる。学生は5つの異なったトピックの中から選択できる。Freshman Inquiryは、学際的なチームを作って働いている教師が教えるコースをいくつか束ねた対話型テーマの一般教育プログラムから始まる。授業はコースの内容についてのグループ討論と講義からなり、学生は授業で与えられた課題を基礎にした議論をする。このようにして、学生は思考によって挑戦しそれを拡大する機会が与えられる。Mentored(良指導者) Inquiry セクションは、学生指導者(Peer Mentors)が指揮して、1週間に2度集まる。Mentor セクションでは、学生は授業の課題に共同して取り組むために、基本的なコンピュータ技能や、研究と著述の高度な技能と技術を学ぶ。

2年目に学生は、3つのSophomore Inquiryコースをとって主専攻とは異なる補足的なトピックを勉強する機会を与えられる。それぞれのSophomore Inquiryコースが上部コースのクラスターへの出口となる。

学生は3年目に、Sophomore Inquiryのそれぞれの主題を拡張している上級コースのクラスターの1つを選んで、それを深く追求する。これらの主題はやはり学生の主専攻の外にあるものである。

4年目の学生は、教師が指導する学際的な学生チームから成るCapstone Experienceを選択し、地域に密着したプロジェクトを行う。その趣旨は、学生に大都市のコミュニティから生じる問題に自分たちの技能を応用する機会を与え、チームで問題を解決する経験を与えることにある。このような要求は、すべてのポートランド州立大学の卒業生に、学部教育の一部として少なくとも1つの地域に密着した学習の経験を持たせることを意味する。これは我が大学にとって重要な改革である。ポートランド州立大学は毎年およそ1,900の学士号を与える。つまり、毎年2,000人以上の学生が250の異なったCapstoneプロ

ジェクトに参加していることになる。これは大きな事業であって、都市型大学としての使命を果たすというこの大学の責任を反映している。

すべてのポートランド州立大学卒業生に要求されるSenior Capstoneの3つの主な目的は以下の通りである。

- ・学生が主専攻で学んだ専門的知識を現実の主題と問題に適用する機会を与える
- ・学生に、専門の異なった領域の人々と一緒に協力することが必要なチームの中で働くという経験をさせる
- ・学生が積極的にこのコミュニティに関係する機会を与える

ファカルティーの一部はこの一般教育プログラムに関して次のような疑問をなげかけている。妥当な配慮ではあるが、一般教育と教養教育のそれぞれの明瞭な目的について混乱がみられると。例えば、学部教育が数学、基礎科学、外国語、歴史、あるいは哲学のコースを含むべきかどうかという問題を取り上げることが重要である。これらは教養教育の問題としては適切である。しかし、これらは一般教育の到達目標を達成するよう作られたコースではない。私たちは、国中の他の組織と同様、この区別を認識するようになった。教師として、学生が教養教育の目標を達する、あるいは主専攻分野の理解を拡げることを助けるために、主専攻のほかにもどのコースを選ぶべきかを決定する必要がある。これは、学生に選択として選べる授業の利用の仕方について、もっと多くの指示を出さなければならないということである。

一例として、このプログラムにおいて学生がたどる経路を追ってみよう。法学部志望、医学部志望、あるいは工学部の学生にどのFreshman Inquiryコースを選ぶべきかアドバイスするでしょう。例えば、「互いに相反する価値について：知識、力と政治」をとるとする。そうするとこのあとは3つのSophomore Inquiryコース、例えば、「社会における職業」、「環境の維持能力」、「自由、プライバシーと技術」を選択することになる。これらの出口コースの1つからさらに上部のクラスター、例えば「環境の理解(生物学)」、「環境の化学」、「環境デザインの基本」を選択する。最終的に彼らは「都市と環境」のようなCapstoneを選択することになる。異なったトピックを選択すれば、特

定の職業のコース, 例えばヘルスケア, 法律, 工学, あるいは職業倫理のコースや職業の社会主義化のコースを選択することになるかもしれない。このあとに Capstone コースが続くことになる。大学学習プログラム (University Studies Program) のいっそうくわしい記述のために, 私は学生が選択可能なコースの範囲を示した材料を用意した。

結論として, 私たちはカリキュラム改革においていま6つの展開が生起しつつあることを確認できる。

- ・多文化主義とグローバリズム
- ・価値とサービスと地域に密着した学習に対するより大きな強調
- ・学習と調査としての教育
- ・共同学習と学部生レベルにおける研究
- ・基本的な知識領域の獲得としての教養教育の明確化
- ・生涯学習のための技能と能力の獲得としての一般教育の明確化

私たちは合衆国におけるこれらの展開に対する多数の反応に注目している。私たちの大学の例が一般教育の新しい方向を指し示していることを希望する。

参考文献

- Damrosch, D. (1995), "We Scholars, Changing the Culture of the University." Cambridge MA.: Harvard University Press
- Douglas, M. (1986), "How Institutions Think." Syracuse, NY.: Syracuse University Press
- Gruber, C. (1976), "Mars & Minerva: WWI and the Uses of Higher Learning." Baton Rouge, LA.: Louisiana State University Press
- Hutchins, M. (1955), "The Great Conversation." Chicago, ILL.: University of Chicago Press
- Miller, G. (1988), "The Meaning of General Education." San Francisco, CA.: Jossey-Bass Publishers
- Ringer, F. (1992), "Fields of Knowledge." Cambridge, MA.: Harvard University Press
- Rudolph, F. (1977), "Curriculum: A history of the American Undergraduate Course of Study since 1636." San Francisco, CA.: Jossey Bass Publishers
- Toombs, W. and Tierney, W. (1991), "Curricular Transformation." Washington DC.: The George Washington University Press
- Zemsky, R. (1990), "Cost Containment: Committing to a New Economic Reality." Change Magazine

(翻訳: 細川 敏幸)